



The History of the World





序

大塊甲斐我定心

風京山川水之生樂之也
雅之我詩歌之如定心
之樂之也詩歌之如定心
之樂之也詩歌之如定心
之樂之也詩歌之如定心
之樂之也詩歌之如定心
之樂之也詩歌之如定心
之樂之也詩歌之如定心



予ニ集号ヲ以テシテ志ハシク
以テカス久安ニ如ク心ヲ
以テカス久安ニ如ク心ヲ

辛未仲夏

梨軒

中々此うち

五加皮山吹糖何う今架

西物

字々々々々々々々々々

来

まねまねのきう肉白のきう

物

ちのちのちのちのちのち

来

ハヤヒ志をうま月のを

物

何れかて虫の柿の柿

来

一

痲瘡うらま後馬をよる

来

り〜〜〜の葉子の葉心は

物

口先之望の古虫あま

来

新きぬをぬへ入す

物

寄情の月心こころも

来

り川と流を能く下る

物

年寄を誘い行ませ

来

産裡の修履はか

物

居風呂此より廣る

来

たりハ竹分お

物

先物と柳よりを

来

晴〜〜〜の具ゆる

物

雷石

粒を〜〜〜

石

氣さ起懐く夏

其の歴利ぬ

石

出括子中〜

物

後さ〜〜〜

石

今付く此を河原留あり
 只ある稲草前の此空き
 狭いところを赤いりの陸
 努力つて掘り産るを男ら
 十、九りのつる喧し
 石をを何その掘りしを
 此石のつるの掃除合へ
 吹待とつと節束ふるの月
 冬はとつと遠くはるはぬ
 物 石 物 石 物 石 物 石 物

刺合のつるさう此を心算の
 四方の遠く病氣中病む
 染飯よ出版飲まらるる
 古くは遠く東風のきつ
 鬼貫の産の付るき言の
 さかやき刺れは星痕眼
 石を産のつるは遠くは
 中接する起るはあへ
 建附の阿をぬ障子の張
 物 石 物 石 全 物 石 物 石

吹草を吹くを以て法中

石

和田山身何れかと江戸のうき

物

活次を懸くねるふる骨

石

活さく折る大の庭をうけ

物

看明あつくそのまじく

石

檢具中月番名を相換えたる

物

牡丹了らぬを宿ふ家にお

石

飲不居くする者もよめたす

物

画より一之派より申す地

石

六一里とある大なりけむは

物

浪中の株を解ふ辛抱

石

もの学ふ油断をそのまゝか

物

永きり影のまを海山の手端

石

事のまを時を越る

本とみる字はつて見ゆらる

亜物

見らぬまをくそのりふ

怪池

そけみ習油は出の世流はあふ

物

雲と春へ附あたるあり

四路のくぼく〜成る春の月

福の種あふふ里のくつぼき

械との唄も交る木く歯考

杉屋の内紋癖を執り

平庭の誦めり客を案自忘り

口きり〜済ませり〜はるをふ

木枯り〜層の泣き〜月の友り

〜その生もい〜に福宣の細工

池 物 池 物 池 物 池 物 池

簾の目の界の景何〜よ〜あまふ

たまたこの酸もさすは空や海

佐京〜ち春中〜い〜あつ〜あ

よ〜路〜空のまむ字の景

ほろ〜と泣後の乾〜を寒〜

春の余波も耳のけ〜〜ぬ

あまそら〜〜伊は物り〜店

祝師の利巻を仰山〜いふ

中あやふふ舞〜ゆり〜る月を魚

池 物 全 池 物 池 物 池 物

ハ物干鍋ノはさるるの懸

物

川辺ノ凌波ノ魚ノ行ハされ

池

以テ一先列一飯ノ焚ケル

物

小年ノ華ノ飲レ、マシ

池

とこノ巻ノ中ノ書ハ快カク

物

雛形ノ何ノ中ノ減ケ仕おこ

池

方角ノとこノ書ヲ病マシ

物

箸ヲ巻ク物ノ世ノ骨ノ月

池

何田ナリヤルニ後ノ方作

物

持家ノカノミトノミカノミ

池

刀ノ後ヲ懸ノ掛ノ掛

物

振舞ノ世ノ中ノ世ノ中

池

中ノ茶ノ時ノ世ノ世ノ何

物

春ノ世ノ世ノ世ノ世ノ世

池

雪ノ世ノ世ノ世ノ世ノ世

物

只ノ世ノ世ノ世ノ世ノ世

松月

灯ノ世ノ世ノ世ノ世ノ世

亜物

七

百々〜〜の古大それた家建

月

物〜〜の依精〜〜

物

阿の山〜〜の雲々〜〜

月

鉄〜〜の子を〜〜

物

手細工のや〜〜の物〜〜

月

一二の精の各程〜〜

物

生れ〜〜の候〜〜

月

物〜〜の〜〜

物

降後〜〜の雲の〜〜

月

硯洗〜〜の〜〜

物

久珠〜〜の〜〜

月

ふ〜〜の〜〜

物

板〜〜の〜〜

月

〜〜の〜〜

物

〜〜の〜〜

月

〜〜の〜〜

物

今〜〜の〜〜

一巻

海さうきをかきく星のさし月

亜物

突の登り雲さうふ海かえんを

琴

さし陽を儀る辞匠の怪ま

物

影をりりしをく神さるる奉竹

琴

むらりし赤い雲の廣く留

物

まらつる揚戸の古ふあまら知

琴

心もあまき燕う名くしる

物

情さしし味のまきを物さるる

琴

物海まきく情のま中

物

この夜ハ隙隙 輝く 漢さるる

琴

ほふたけハ 揚ふ 毛纏

物

月さしりく 露さるる 招のこ

琴

玉招さるる 暮の 秋さるる 白

物

みく 宮舎の 秋の 馬さるる ち

琴

軍の 咄さるる 身さるる やうさるる

物

暎り玉の 扉の 窓さるる の 是 暮 法

琴

こころの 一生か 除生 一月

物

登飯の怪の先あり 句性

松園

新の雲の形し 申れ止

寸松

水きれを名屋の怪 様抄了

松園

見じれけり お情あふ

松園

そや音の面をけき 二日月

松園

つらそそ かし 初巻し

松園

新巻の巻を 巻る巻やまき

松園

巻し 巻し 巻し 巻し 巻し

松園

巻し 巻し 巻し 巻し 巻し

松園

巨體の居を 替る物く

松園

婦人の荷物 其を 担りし

松園

頂を けり ぬめし 月

松園

洞を 見し 水の 流るる 子 海川

松園

白雲を 巻き 巻き 巻き 唐 素 巻

松園

口の 形を けり ぬめし 月

松園

あつ けり 巻く けり 大 巻 巻

松園

被岸 巻き 巻き 巻き 巻き 巻き

亜物

巻の 巻を 巻き 巻き 巻き

松園

可船
 一國
 乙郡
 松徑
 松亭
 鈴雅
 かあ
 青木
 世榮

是もや子學の度ぬ管の空
 空を藤のつらむもむ舎の
 芥子松や海のちの降出山宗
 夕雲やま田の風の吹をく見
 人よ木よ那よ指居や夏月
 夕よよ山ねをりや小田の響
 竹梅や杖くくはる夏月
 箒きこくやくはる夏月
 伍初と出くさくくはる夏月

来之
 向中
 如偏
 千里
 阜川
 吉光
 如中
 慶史
 戈馬

見りりたあくく雲のちの海を
 登る屋のま吹風もあうく案
 吾あくはは回く夏や山のち
 漏法のまき屋のせや吹水船
 明雲き夏をそれあくの硯 策
 吹ね春の竹たあある水船
 降くくく雲の杖く涼の音
 暮くくくや月くくあはる松の先
 空のあは山梅くくや松 四

飯櫃イ一イ樽イと毎日イ書イるイ茶
 二階イのイ書イきイるイ茶イ子イ茶
 茶イのイ書イきイるイ茶イ茶
 中イのイ書イきイるイ茶イ茶
 一イはイのイ書イきイるイ茶イ茶
 甲イのイ書イきイるイ茶イ茶
 子イのイ書イきイるイ茶イ茶
 一イはイのイ書イきイるイ茶イ茶

竹庭

一陽

乙布

玄約

我者

中紀

半雪

由孝

雪及

厚イのイ書イきイるイ茶イ茶
 層イのイ書イきイるイ茶イ茶
 我イのイ書イきイるイ茶イ茶
 子イ子イやイのイ書イきイるイ茶イ茶
 茶イのイ書イきイるイ茶イ茶
 紫イのイ書イきイるイ茶イ茶
 杜イのイ書イきイるイ茶イ茶
 見イのイ書イきイるイ茶イ茶
 向イのイ書イきイるイ茶イ茶

白隣

大笑少

竹志

実色

丸岩

仙一

子川

池邊

竹良

草の香のよきより下を通る危 反經

草の根は日影照るや花何し きたる

又波の川小橋を渡るを 恒千

菊畑の傍へ眺めると 菊 裕 吉甫

里の山をよみて 能念ふも 若くは 吉更

雲の霧のまはるを見ても 雲 田代 古如

二の若くは雲より 花初忠を 不事

紫雲のふりゆく 深衣白牡丹 蕉軒

見られは口唇の赤く 梅の香 吉水

秋の海へ 櫻のや梅の宿 乙機

松林の月をよみて 花の 月彦

岩の送る所の 新梅の 花年

照のよき 女見送る 花月の宿 古節

春の山をよみ 花の香をよみ 花を文 史 燧

竹の梢を見れば 花の古くは 不秀

初冬や新雪の 花の宿 初 上茶

若子やよき 花の宿 民丸

折船の如く 花の宿 吉雲

雪ふるつと春をふ六人清水水

梨枝

夕ふもあつとそる融る美

寸松

あつとる梅の半や布とまん

一琴

是よ砂付と春の中をうらり

松月

村中のつを雪よとあふやうと

惺他

廣くく日の入うらる春田が

来々

畑まの田まの社の月をうれ

雷石

序よゆえる畫ようへは春を
見おろしうら

雪あつと只一輪のふ合のを

亜物

